

牛肉

◆飼養動向

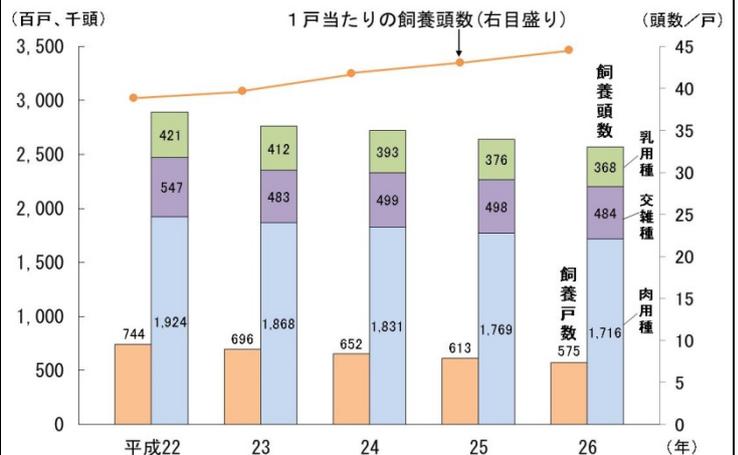
26年2月現在の肉用牛飼養頭数、2.8%減少

肉用牛の品種別飼養頭数を見ると、肉用種は18年以降、増加傾向で推移していたが、23年に宮崎県の口蹄疫の影響などにより減少に転じ、26年は171万6000頭(前年比3.0%減)となった。乳用種は17年以降、減少傾向で推移し、22年に6年ぶりに増加に転じたものの、23年に再び減少に転じ、26年は36万7500頭(同2.1%減)となった。交雑種は21年以降、減少傾向で推移し、24年に3年ぶりに増加に転じたものの、25年に再び減少に転じ、26年は48万3900頭(同2.8%減)となった。この結果、26年の肉用牛の総飼養頭数は、256万7000頭(同2.8%減)と5年連続で減少した。

また、26年の飼養戸数は、生産者の高齢化による廃業などから、5万7500戸(同6.2%減)と減少した。

この結果、1戸当たりの飼養頭数は前年より1.5頭多い44.6頭と、集約化が続いている(図1)。

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数



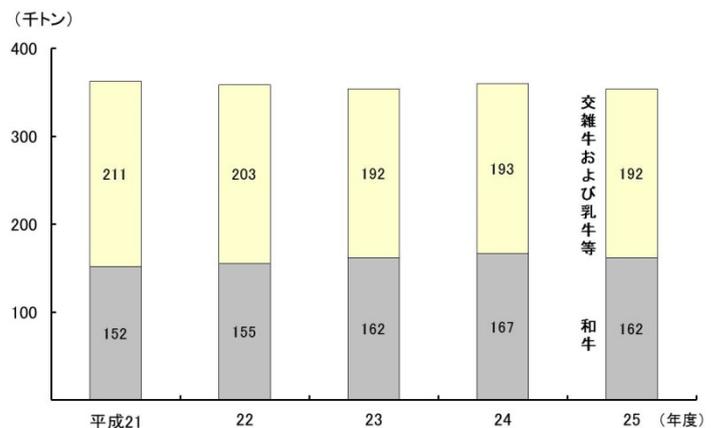
資料: 農林水産省「畜産統計」
注: 各年2月1日現在

◆生産

25年度の生産量、1.6%減少

牛肉の生産量は、21年度以降、和牛が増加する一方で、交雑牛および乳牛などが減少したことにより、全体としては減少傾向で推移していた。しかし、24年度は、22年頃に生乳需給が緩和したことを背景に、酪農家において乳用種との交配に代えて黒毛和種との交配が進んだことから、交雑牛が3年ぶりに増加に転じ、和牛も8年連続の増加となったことから、生産量全体は4年ぶりに増加した。25年度は、交雑牛は7万8900トン(前年度比4.6%増)と、2年連続の増加となったものの、和牛が16万2100トン(同2.9%減)と、9年ぶりに減少に転じたことから、生産量全体は再び減少した(図2)。

図2 牛肉の生産量



資料: 農林水産省「食肉流通統計」
注 1: 部分肉ベース
2: 交雑牛および乳牛等には、外国種等を含む

◆輸入

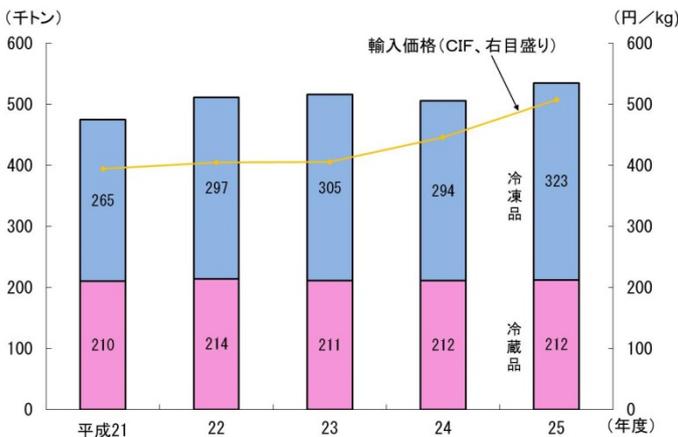
25年度の輸入量、5.9%増加

牛肉の輸入量は、20年度以降増加傾向で推移していたものの、24年度は、冷凍品の減少などから前年度を下回った。25年度は、米国産の増加により、53万5500トン（前年度比5.9%増）と、前年度をやや上回った（図3）。

米国産は、牛海綿状脳症（BSE）の発生により輸入が停止されていたが、18年8月の輸入再開以降、増加傾向にあり、25年度は同年2月の月齢制限緩和措置（月齢制

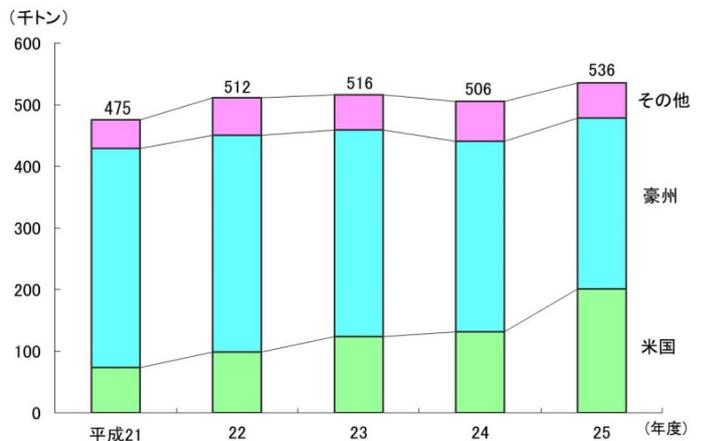
限を20か月齢以下から30か月齢以下に引き上げ）により20万1100トン（同52.8%増）と、前年度を大幅に上回った。輸入牛肉の約5割を占める豪州産は、27万7700トン（同10.1%減）と7年連続で減少した。また、豪州産、米国産に次いで多いニュージーランド産（「その他」に含まれる）は、2万8300トン（同9.4%減）と減少した（図4）。

図3 牛肉の冷蔵品・冷凍品別輸入量と輸入価格



資料：財務省「貿易統計」
注 1: 冷凍品にはくず肉等を含む
2: 部分肉ベース

図4 牛肉の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース

◆消費

25年度の推定出回り量は1.0%増加、家計消費は1.2%増加

推定出回り量

牛肉の推定出回り量は、19年度以降、国内生産量の増加や米国産の輸入量増加などを背景に増加傾向で推移していた。24年度は、国産品がわずかに増加した一方、輸入品は輸入量の減少により前年度をやや下回り、6年ぶりに減少に転じた。25年度は、国産品は生産量の減少に伴い、前年度をわずかに下回った一方、輸入品は輸入量の増加により、前年度をやや上回ったことから、全体では86万7000トン（前年度比1.0%増）と、再び増加した（図5）。

図5 牛肉の推定出回り量

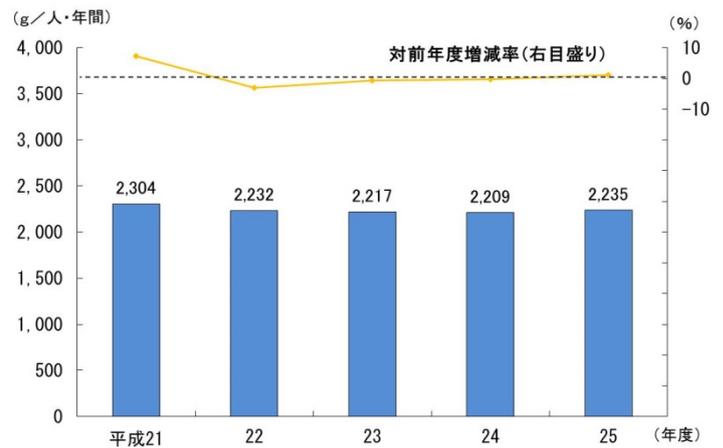


資料：農林水産省「食肉流通統計」、財務省「貿易統計」より
農畜産業振興機構で推計
注：部分肉ベース

家計消費

牛肉需要量の約3割を占める家計消費は、15～20年度にかけておおむね減少傾向で推移した。21年度は小売価格が低下したため、牛肉の値ごろ感が高まり、家庭での消費が増加したものの、22年度以降は、景気低迷による消費の減退、東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う放射性セシウム検出問題などにより、減少傾向が続いた。しかし、25年度は、景気の回復基調などに伴い、年間1人当たり2235グラム(同1.2%増)と、4年ぶりの増加となった(図6)。

図6 牛肉の家計消費量(年間1人当たり)



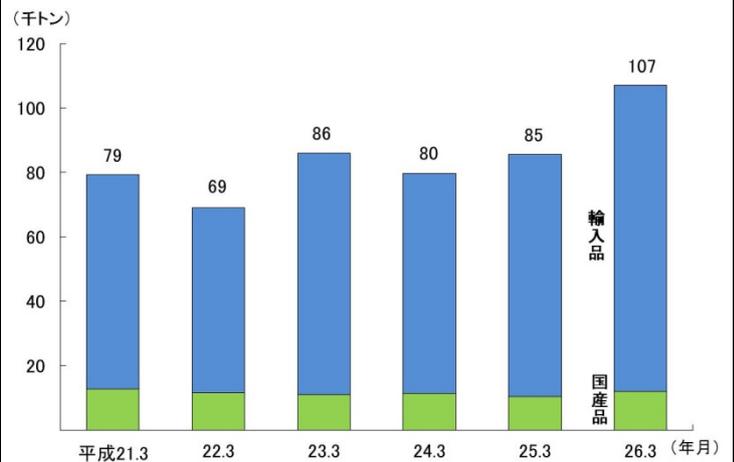
資料:総務省「家計調査報告」

◆在庫

25年度の期末在庫、25.4%増加

牛肉の推定期末在庫量については、23年度は、国産品が1万1400トン(前年度比4.5%増)とやや増加したものの、輸入品が6万8400トン(同8.9%減)と、かなりの程度減少した。その結果、全体では7万9700トン(同7.2%減)とかなりの程度減少した。24年度は、国産品が1万400トン(同8.4%減)と減少した一方、輸入品が7万5100トン(同9.8%増)と増加した結果、全体では8万5500トン(同7.2%増)と増加した。25年度は、国産品が1万2000トン(同15.3%増)と、かなり大きく増加し、輸入品もBSEに関連し、米国産牛肉の輸入月齢緩和に伴い、9万5200トン(同26.8%増)と、大幅に増加した結果、全体では、10万7200トン(同25.4%増)と、大幅に増加した(図7)。

図7 牛肉の推定期末在庫量



資料:農畜産業振興機構調べ
注:部分肉ベース

◆枝肉卸売価格(東京・省令)

25年度の卸売価格(省令規格)、161円高の1キログラム当たり1160円

省令規格

牛枝肉卸売価格(東京・省令)は、22年度は、交雑種の卸売価格の上昇などにより、1キログラム当たり1108円(前年度比9.3%高)と、前年度をかなりの程度上回った。23年度は、放射性セシウム検出による風評被害から、同843円(同23.9%安)と大幅に低下したが、24年度は徐々に回復し、同999円(同18.5%高)、25年度は生産量の減少や景気回復基調などから上昇傾向が継続し、同1160円(同16.1%高)と、前年度を大幅に上回った(図8)。

図8 牛肉の卸売価格(東京・省令規格)



資料:農林水産省「食肉流通統計」

注 1:省令規格は、去勢牛B2とB3の加重平均
2:消費税を含む

和牛

和牛(去勢)の卸売価格は、22年度は、消費低迷などから各等級とも低下し、さらに23年度は、放射性セシウムの検出による風評被害から、A5が1キログラム当たり1852円(同11.3%安)、A3が同1270円(同15.7%安)と、いずれも大きく低下した。しかし、23年度後半から徐々に回復し、25年度は生産量の減少や景気回復基調などにより、A5が同2138円(同8.5%高)、A3が同1725円(同13.2%高)と、いずれも上昇傾向が継続した(図9)。

図9 牛肉の卸売価格(東京・種別)



資料:農林水産省「食肉流通統計」

注 1:消費税を含む

2:23年7月の乳去勢B2については取引実績がない

乳牛

乳牛(乳用種去勢B2)の卸売価格は、22年度は、和牛と同様に消費低迷などからかなり低下した。また、乳牛は、3品種の中で放射性セシウム検出による風評被害が特に大きく影響し、23年度は1キログラム当たり458円(同30.1%安)と大幅に低下したが、24年度は同639円(同36.6%高)と、22年度実績に迫る水準まで回復し、25年度は競合する輸入品の価格が高水準で推移していたこともあり、784円(同22.6%高)と、前年度を大幅に上回った。

交雑種

交雑種(去勢B3)の卸売価格は、18年度以降、生産量の増加により前年度を下回って推移していたが、22年度は、生産量の減少により前年度を大幅に上回った。23年度は、他の品種と同じく放射性セシウム検出による風評被害から、1キログラム当たり1003円(同16.3%安)と大幅に低下したものの、24年度は、同1107円(同10.4%高)と、かなりの程度上昇した。25年度は、生産量は増加したものの、景気回復基調などもあり、同1249円(同12.8%高)と、かなり大きく上昇した。

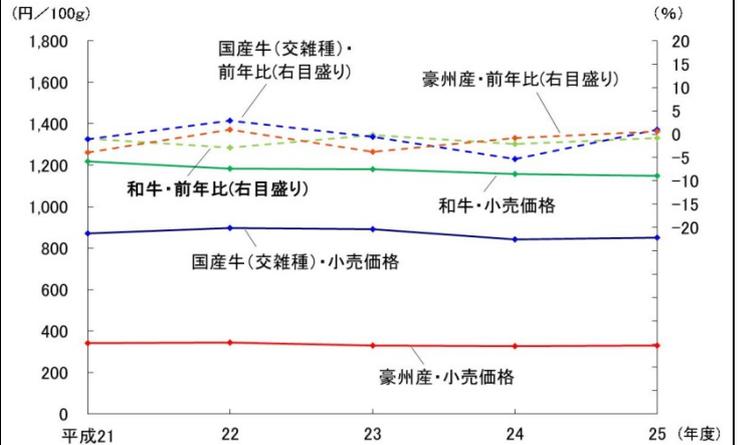
◆小売価格

25年度の小売価格、国産品、輸入品共に値上がり

牛肉の小売価格(サーロイン)は、消費者の経済性志向の高まりにより高級部位が敬遠されたことから、21年度以降、横ばい、もしくは下落基調で推移していた(図10)。25年度は、和牛は100グラム当たり1148円(前年度比0.8%安)と、下落傾向が継続している一方、国産牛(交雑種)は同852円(同1.0%高)と前年度を上回った。

豪州産牛肉は、22年度は輸入冷蔵品の供給量が減少したことなどから、前年度を大幅に上回ったが、23年度は低下し、24年度も同329円(同0.9%安)と値下げした。しかし、25年度は現地相場高などにより、同331円(同0.6%高)とわずかに前年度を上回った(図10)。

図10 牛肉の小売価格(サーロイン)



資料:農畜産業振興機構調べ
注:消費税を含む

◆肉用子牛

25年度の肉用子牛価格、黒毛和種、ホルスタイン種共に上昇

黒毛和種

黒毛和種の子牛取引価格は、22年度から上昇傾向で推移し、25年度は堅調な枝肉卸売価格に後押しされ、1頭当たり50万3000円(前年度比20.0%高)と大幅に上昇した。取引頭数は、17年度以降増加傾向で推移したが、22年度は、宮崎県における口蹄疫発生の影響により減少した。23年度以降は若干回復基調となったものの、25年度は繁殖めす牛の減少に伴い、出生頭数の減少が継続していることから同35万1100頭(同2.9%減)とわずかに減少した(図11)。

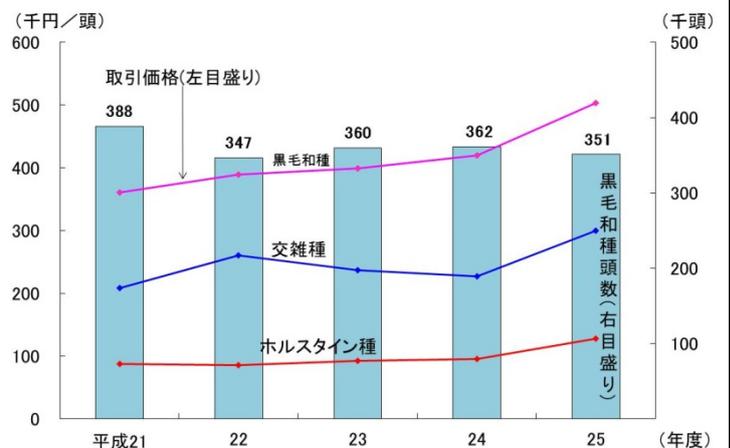
ホルスタイン種

ホルスタイン種の子牛取引価格は、19年度以降、枝肉卸売価格の低下などから下落傾向で推移していたが、23年度は、取引頭数の減少により上昇に転じ、25年度は堅調な枝肉卸売価格もあり、1頭当たり12万7500円(同33.5%高)と大幅に上昇した。

交雑種

交雑種の子牛取引価格は、23年度以降は取引頭数の増加により下落傾向で推移していたが、25年度は1頭当たり29万9500円(同32.1%高)と、前年を大幅に上回った。

図11 肉用子牛の市場取引価格と黒毛和種頭数



資料:農畜産業振興機構調べ
注:消費税を含む